

07・楽園の入り口（わたし、あるいはあたしの望み）

本編『06・出会って二週間、突然プレゼントをされる』から数日後。  
とある年の春。

五月二十八日。十三時ごろ。

場所とはある貸し倉庫、受付前。

天気は晴れ。室温は二十三度程度。

今日も素晴らしい気候だ。

大きめの建物のロビー。声がよく反響する。

SE1 貸し倉庫受付の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0―7秒ほど流して『職員』のセリフ】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

——その日は普通の、おおむねいつも通りの朝のはずだった。

主人公はいつもより少し早い朝六時、植物のミネルヴァにくすぐられるような形で起こしてもらって。

くすくす笑いながら起き上がれば、つるの指先が今日の服を見せてくれる。

その素晴らしさについてコメントしながら洗面所に向かい、顔を洗って歯を磨いたら、早速着替えて。ドレッサーに座り、今日も驚くべき速度で進む完璧なヘアメイクに感服しながら……仕上げとして、以前石のミネルヴァがプレゼントしてくれた、大きな赤い石の付いたネックレスをつけてもらい、最高の自分にしてもらう。

そうして支度が出来たら、傍らで眠っていた液体のミネルヴァを連れて、ミネルヴァの寝室まで、三人で彼女を起こしに行く。

ベッドで目を閉じたままの彼女は、いつも寝ているのか、寝たふりをしているのかかわからない。

だから主人公は今日もそーっと近づき……瞼に、頬に。そして、唇にキスをして起こす。こんな事をするのは、本当はものすごく恥ずかしいし、何度繰り返しても照れくさい。……けれど、こうしたら、ミネルヴァは必ず喜んでくれるから。

上機嫌で目覚めて、今日のスタイルをとびきり褒めてくれて、沢山キスしてくれるから。

主人公は毎朝そうするし、今日も、そうした。

そうして甘く気恥ずかしい朝の挨拶を終えたら、四人でキッチンへ移動。仲良く食卓を囲んで、石のミネルヴァが用意してくれていた朝食をとる。

調理してくれた彼女へたっぷりと感謝を伝えながら、お腹と心を満たす。

食後は片づけを手伝った後、十一時ごろまでは通常の業務。

時間になったらミネルヴァのクローゼットへ移動して、今日から数日家を空ける彼女の荷物の最終チェックを行う。

植物のミネルヴァと荷造りを終えた頃やってきたミネルヴァは、植物のミネルヴァのはからいだろう。主人公とまるで二人で一組、二人で示し合わせたみたいな服装をしていて驚いた。

けれど、この格好で一緒に歩けば、周囲はきっと二人がカップルだと……少なくとも、特別に親しい関係だと認識してくれるだろう。

そう思ったら主人公は嬉しくて、面映ゆくも、出発が待ち遠しくなった。ミネルヴァと一緒に出掛けるのは、今日が初めてだったからだ。

そして時間になり、家の前まで来てくれた馬車に乗り込んで、二人は一緒に駅まで向かう。

駅についても手をつないだまま、慣れない外出と駅に緊張気味のミネルヴァの世話を主

人公はかいがいしく焼き、すでに手配してもらっている切符を、ミネルヴァの代わりに駅員に渡す。

その後はホームで汽車が来る瞬間までおしやべりして、ミネルヴァがそれに乗り、席についてガラス越しに何度も手を振って、たった数日の別れを惜しみながら見送る。

その後はどきどきしながら倉庫まで行って、プレゼントを受け取り……近くの喫茶店にでも入って開封したら、愛する人から贈り物を受けた喜びかみしめて、帰る。

五月二十八日とは、そういった一日になるはずだった。

それなのに主人公は今、倉庫の受付で立ち尽くし、受付の女性はすっかり困惑している。その日は極めて普通の、おおむねいつも通りの朝から始まった。

だから、想い人としばしの別れを経て、少し淋しくなったとしても。最終的には、幸福感に包まれる一日となる。

そう思っていたはずなのに、現実は大きく違っていたからだ。

#### 〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに、上品に。

この仕事に就いて二年程度の、三十歳くらいの女性職員。

落ち着いた雰囲気、感じの良い女性。

彼女は、この仕事についてからはさほど長くない。

だが、社会人経験は長く、特に接客に長けている。

なので実質的にはベテラン職員とさほど変わらず、丁寧な口調で主人公に、ミネルヴァから預かった荷物を引き渡している」

お預かりした物は、以上になります。

どうぞお持ち下さいませ」

〈主人公〉

「……あの……」

〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

少しだけ驚き、困ったような様子で。

主人公が不思議な事を聞いてきたので。

まさか、そのような事を聞かれるとは思っていなかったのだ。

しかし、大げさにはならない。これまでの経験から、トラブルには慣れているので」

「……え？」

〈主人公〉

「わたし宛の荷物というのは、本当にこちらなのでしょ……？」

聞きながら、声がこわばった。

職員に聞いたところで、『はい』という答え以外は返ってこないだろう。

主人公だって、そんな事はわかっていたのに。

それでも聞かずにはいられないくらい、目の前の光景は信じられなかった。  
信じられなかったのだ。

ミネルヴァがまさか『こんなもの』を自分に贈るだなんて。

〈主人公〉

「……あ。

おかしい事をお聞きして、申し訳ございません。

でも、その……。

話に聞いていたものとは、随分違うというか……。

……あの、恐れ入ります。

お手数おかけして申し訳ございませんが、もう一度ご確認いただけませんか」

〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

少し驚き、困りつつも、主人公の要望に応えようとする。

主人公の様子が、何やらただ事ではないので。

普段は落ち着いている彼女でも、これは気になるので。

『これは、わざわざミネルヴァ本人から内容物の説明があつた荷物だ。間違いがあるとはとても思えない。だけど、この方の様子は明らかに変だ。万が一と言う事もあるし、今はこの方に従おう』という感じで」

……あ……ええ。

【少し戸惑いつつも、声を元のトーンに戻していく】  
承知致しました。

それでは念の為、物品リストのご確認を致しますね」

〈主人公〉

「……よろしくお願いします」

それでも、職員はどこまでも親切だ。

主人公の明らかに不審な態度、要望に内心『一体何を言っているのか』と思っているだろうに。二つ返事で応えてくれ、リストを見直してくれる。

だが……。

## SE2 職員がリストをめくる音

【最初から最後まで流す】

### 〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

※セリフ終わりまで、重要な説明セリフなので、少しゆっくり目に話す※  
この状況に戸惑いつつも、声を元のトーンに戻し、穏やかに話す」

まず……この度ミネルヴァ様からお預かりしましたのは三点になります。

一点目は、こちらの書類。『推薦状』との事でございます。

【少し自信なさげに。

二点目の小瓶の内容物がなんなのか、自分にははっきりとわからないので。  
職員は、ミネルヴァがどのような仕事をしている人物なのかを知っている。  
だから『おそらく薬ではないか』とは思っている。

しかし自分は素人であるため、想像で判断しない方がいい。ここは『小瓶』という表現



にとどめるのが適切だろうと考えたので」

二点目は、こちらの……。小瓶となります。

そして最後に……。三点目は、こちらの再生機でございます。

こちらはミネルヴァ様から言伝（ことづて）をお預かりしております。

『受け取り次第再生し、音声聞いて頂きたい』との事です」

〈主人公〉

「……………」

だが、そんな彼女の努力に、主人公は報いる事ができない。

変わらず言葉を失ったまま、ただ青い顔をし、手を震わせるばかりだ。

推薦状。

小瓶。

音声再生機。

そのいずれも、三日前、ミネルヴァが話していたものと目の前の物品は、あまりにも結び付かない。

いや……一致しているのかもしれない。

『主人公の役に立つ』という意味では。

ミネルヴァは、これらを、きつと——……。

十秒ほど沈黙。

〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

※息づかいのみ※ で表現する。

困ったように息をのむ。

主人公が絶句しているの。

その顔は真っ青で、とてもこれを受け取って喜んでいるようには見えず、ただただ戸惑っているように感じられるので。

『もしこれが、仕事と関係ない事象であっても、自分は彼女の事がきつと気になっただろう』と思う位、主人公の様子がおかしいので」

……。

【※小さく息を吸ってから※ 話す。

※職員の優しさが伝わる感じで※

少し戸惑いつつも、穏やかに、落ち着いて話す。

職員として、主人公にアドバイスする。

本来自分が出る幕ではないと思いつつも、あまりにも主人公が狼狽しており、気になるので、自分なりの解決策を主人公に示す」

……あの。

差し出がましい事とは存じますが……。

ミネルヴァ様は、再生機の件を強調しておられました。

ですので、まずはメツセージをお聞きし……その後、ご本人様とご連絡を取られるのはいかがでしょうか」

### SE3 クロエの足音

【最初から最後まで流す】

【とても遠くから、だんだん近づいてくる】

【次の『職員』のセリフと重ねて流す】

絶句する主人公の背後から、足音が近づく。

その歩き方は、その靴音は。

主人公にとって、あまりにも耳慣れた音のはずだ。

だから普段の主人公なら、それが誰のものであるか、絶対に気づいて振り返る前からもう笑顔になって、その名を呼んでいたはずだ。ただ今の主人公は、背後に誰かがいる事にすら気づいていない。その位、もう主人公は——『普段の自分』ではなくなっていたのだ。

#### 〈倉庫職員〉

「主人公に話しかけている。

※職員の優しさが伝わる感じで※

少し戸惑いつつも、穏やかに、落ち着いて話す。

引き続き、自分なりの解決策を主人公に示す。

クロエが近づいてきている事には気づいていない」

通信機がご入用（いりよう）でしたら、有料にはなってしまいますが、こちらでお貸しする事もできます。

【言葉が途中で途切れる。

クロエが声をかけてきたので】

ですの……」



ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から聞こえる】

【背後から聞こえる】

【だんだん近づいてくる】

〈クロエ〉

● 正面 30センチ

「【※息を切らして※ 言う。

主人公に話しかけている。

とても忙しい中を、急いできたので、苦しそうにしている。

それでも、明るい声で、普段通りに話しかける。

主人公に会えた事が嬉しく、また、今日はとても良い話を進められると思っているので。

クロエは今日、ミネルヴァに頼まれて『ある事』を手伝いにここまでやってきた。

ここで主人公と待ち合わせをして、それを進める予定だった。

なので、主人公は当然それを承知して待っていたのだと思っているので】

……あー………！ 居た………！ お待たせー………！

〈主人公〉

「！」

こうして主人公は、呼ばれてようやく『彼女』がここに居る事に気づいた。  
しかし、なぜこんな所に彼女がいるのだろう。  
なぜ、最初から約束をしていたみたいに『お待たせ』などというのだろうか？  
そこまで思考を巡らせて、ようやく理解する。  
『ミネルヴァが呼んだのだ』と。

### ▲ ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

【背後から聞こえる】

【だんだん近づいてくる】

〈クロエ〉

### ● 正面 30センチ

「主人公に話しかけている。

明るく優しく、いつも通り話しかける。

『以前とは雰囲気随分違うから、見かけてもすぐに主人公だと気づかなかった』という意味で言っている。

しかし、内心少しぎよつとしている。

主人公の身なりが、二週間前とは明らかに違うほど良くなっている。

主人公は今『お金持ちのお嬢さん』としか思えない格好をしているので。

なのですぐに『これは明らかに主人公が、自分のお金で揃えたファッションではない。となると、ミネルヴァの援助によるものだ。つまり、二人の関係はそんなにも深いのか』と気づいたので」

遅れちゃってごめんね。

あはっ。

なんかいつもと感じ違うから、すぐわかんなかった……！」

#### 〈倉庫職員〉

「【※息づかいのみ※】で表現する。

クロエに話しかけている。

少し、だが、明らかにほっとした様子で。

職員はミネルヴァから、クロエの特徴を聞いた上で、彼女にも言伝をするように頼まれていた。

実の所、『そんな特徴だけで気づく事ができるのだろうか』と少々困っていたが、その特徴と一致する女性が主人公に声をかけてきた事で『おそらく彼女で間違いなさそうだ』と思えたので。

彼女が来れば、主人公はもう一人にならない。

それに、クロエがこの件について知っているかもしれないので少し安心する」

……！

魔法協会職業斡旋所職員の、クロエ様ですね。

お待ちしております。

貴方様にも、ミネルヴァ様から『言伝と一緒に聞き頂きたい』と仰せつかっております」

〈クロエ〉

●正面 50センチ

「職員に話しかけている。

ぎよつとして。

予想だにしない展開となり、一体、ミネルヴァが何をしようとしているのか、まるで見当もつかないので」

……えっ？」

そんな主人公とクロエを交互に見て、倉庫職員がほっとしたようにこう言った。

だが、クロエも主人公も、この状況についていけない。

ミネルヴァが仕組んだこの状況に、取り残されている。



〈クロエ〉

●正面 50センチ

「主人公に話しかけている。  
愕然として。

何が起きているのか全く分からないし、主人公の顔が『何があつたの』と聞かずにはいられないほど、それはひどいものなので」

……ねえ。何。

どういう事……？

一体、何があつたの？」

一度フェードアウトする。

約十分後。

二人、ひとまず外のカフェに移動し、テーブルをはさんで向き合う形で座っている。外はいい天気で、周囲はとてものどかだ。

主人公とクロエ以外は、全員が平和な午後を過ごしているように見える。

### SE3 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—7秒ほど流してSE4】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

### SE4 クロエが再生機のスイッチを押す音

【最初から最後まで流す】

そんな中、クロエが再生器のスイッチを押す。

すっかり憔悴し、ボタン一つ押す事すら困難な主人公の代わりに、そうしてくれたのだ。

### ▲ ボイス加工あり

【極端に音質が悪く、ノイズ交じりに加工する】

### ● 正面 30センチ

「【淡々と読もうとしているが、どうしても声が暗い】

こんにちは。

私は今、音声記録魔法を使って声を届けています。

貴方がこれを聞いているという事は……もう、無事に書類と小瓶をお受け取りになられたのよね。

【長めに間をあけてから。

ミネルヴァ自身、切り出しにくい事なので】

それが、私からのプレゼントです。

私の推薦状と、課題薬。

この二つを、これからお越しになるクロエさんにお渡しして、七月の試験の受験申請を  
して下さい。

ぎりぎり、二十八日の十四時……締め切りに間に合うはずよ。

……。

突然このような事をして、驚いているわよね。

私自身……良い事をしていると思っっている訳ではないし。

貴方に嫌われても、仕方のない事をしてると、思う……。

でも。私は貴方に諦めて頂きたくない。

貴方には、貴方らしい生き方をして欲しいの。

私は貴方が正しく評価されて、あるべき暮らしをする為のお手伝いがしたい。

その為に、私と貴方で作ったお薬を提供する事に決めました。  
どうか使って下さい。

……。

それでは、ごきげんよう。

帰った時、良い話が聞けるのを期待しています」

8秒ほど沈黙。

〈クロエ〉

●正面 50センチ

「※息づかいのみ※ で表現する。

大きく息をつく。『なるほど。そういう事か。その為に自分は呼ばれたのか』と理解する」  
……。

【ひとりごとのように。

普段通りの優しい言い方を心がけているが、少し怒りと呆れが滲んでいる感じで。

『ミネルヴァのやり方には納得できないが、経緯は理解した』という意味で言っている】

……なるほどね。そっか。

……そういう事か……」

〈主人公〉

「クロエ。ごめんなさい。その……巻き込んでしまつて……」

クロエがため息をつき、主人公はスカートを握りしめて頭を下げる事しかできない。だつてこんなの、クロエ自身、わけがわからないだろう。

急に呼び出されたかと思つたら、何も知らない主人公が青い顔をしていて。いまだ呆然自失状態なのだから。

もし、こんな時、植物のミネルヴァがいてくれたのなら。落ち着くまでそつと慰め、主人公に安心感を与えてくれ。それから『今するべき事をなさい』と、クロエへ説明するよう促した事だろう。

だけど、それは不可能だ。彼女たちは今、あの家で留守番をしているからだ。

こうなつてようやく、自分は心底ミネルヴァに依存していたことを実感する。

目の前のクロエにも、気を遣わせている事がはつきり分かった。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「以後、すべて主人公に話しかけている。

ハッと気づいたように。

『しまった。怒っているみたいなの声に聞こえちゃってたかも。少なくともあたしは、あなたに対しては全く怒っていないからね』と安心させるような感じで。

しかし、主人公があまりにも弱り切り、申し訳なさそうにしている事に正直驚く。

クロエとしては、主人公はこの件に対して、絶対に怒り出すだろうと思っていたので」……あ。ごめんね。大丈夫だよ。

あたしは平気。

【『あと一時間と少し。三時位までは、外での仕事として認めてもらえる。つまり、一緒にいられる』という意味で言っている】

ちゃんと職場に伝えてから来てるから。まだ十分（じゅうぶん）いれる。心配しないでいいからね」

〈主人公〉

「……………」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「『できるだけ優しい言い方ができるように、努力しながら話す。』

言葉を選び、苦悩しながら尋ねる。

もし主人公がミネルヴァの意向に従い、申請をする気なら、もう話を進めないと、とても間に合わないのです。申請の締め切りは二時までで、もう一時をとくに過ぎているのです。

『このメッセージ』とは、『今一緒に聞いた、ミネルヴァからの音声メッセージ』の事』でも……申請の方はもう時間がないから、聞くね。

このメッセージについて、いくつか聞かせて。

【できるだけ優しい言い方を心がけつつ、尋ねる。

今から自分が聞く事は、主人公の性格からしてとても考えられない事ではある。

クロエ自身『これは確実にないだろう』と思っている。

だが、まずは可能性を一つつぶす目的で質問する。

『これ』とは『ミネルヴァが、課題薬に相当するものを主人公に譲渡する事』を指している】

まず……これは、二人で話し合った結果？

例えば、『どうしても試験を受けたいから、手助けして』ってあなたがお願いしたとか。だからミネルヴァさんは、あなたにこの薬をプレゼントしようと思ったって事なのかな？」

クロエの問いに、主人公は大きく首を振る。

だが、首を振るのが精一杯。今言うべき事が、説明すべき事が、何一つ言葉にならない。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「『やっぱりそうなんだ……』という感じで。

本音を言えば、ミネルヴァのやり方に心底呆れている。

だが、気持ちを抑えて、できるだけ優しく、主人公を刺激しないように。

自分の発言や声音が、主人公の精神状態や決断を左右しないように話す。

心の中では、主人公の意向を無視して話を進めるミネルヴァに呆れている。

『『貴方のため』』とは言いながら、随分一方的で勝手な事をする人なんだな。自覚はあるみたいだけどね……』と思っている。

なのでなおさら、クロエはこの件について主人公が怒り出さない事が意外である。

クロエの中では、主人公は『こんな事をして、わたしが喜ぶとも思っているのかしら！ふざけているわ！』位の事は確実に言い、悔しさに涙をにじませる。そういった女性だからだ。

そしてそのまま一瞬も悩まず『推薦状も薬も受け取らない。試験は受けない。そしてこれからこの件について、ミネルヴァと話し合ってくる』と言うのだと思っていたので」

……だよな。



お互い納得してるなら、こんな渡し方する訳ないもんね。

【少し間をあけてから。

クロエ自身聞きづらい事ではあるが、時間がないのを考慮し、勇気を出して尋ねる。  
最も重要な事を聞く。

主人公の回答次第では、いくらミネルヴァの意向と言えど、クロエは申請を手伝う訳にはいなくなるので。

クロエは主人公の様子を見て『もしかすると、主人公はこのまま推薦状と薬を受け取り、申請をするという選択も考えているのかもしれない。もしそうなら、できる限りその意思を尊重したいとは思っているけれど、難しい場合もある』と思っているので」  
じゃあ、次に。

この薬って、あなたはどの位制作に関わったの？

この話の限りだと『ミネルヴァさんとあなたが二人で作った』って風に受け取れるんだけど……。

【少し聞きづらそうに。

聞きづらい事ではあるが、はっきりさせておかないといけない事なので。

一応は質問しているが、答えは『ノー』だと思っている。

『もしそうなら、もっと別の方法で渡しているだろう』と考えているので」  
もしそうなら。

やっぱりこんな渡し方、しないよね？」

〈主人公〉

「それは……完全な間違いとは言えないの」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「きよんとして。」

主人公が非常にあいまいな表現をしたので。

困惑する。このような言い方は、まるで主人公らしくないので「え？」

ようやく振り絞った情報は、当事者でありながら、あまりにもあいまいなものだった。当然クロエは困惑した表情を浮かべ、だが、それが主人公の今にも折れそうな心を奮い立たせてくる。

事態の補足は自分にしかできないと、思わせてくれるからだ。

〈主人公〉

「この薬は……半月程前、わたしが例の奇病に罹患した時に、わたしからとったサンプルを基に作っているのだと思う。」

ミネルヴァが、そう言っていたから。

あと、本当に。本当にほんのわずかなのだけれど……。

一部の成分の抽出法は、わたしが考えた。

そういう意味では、全く無関係とは言えないわ。

制作には、関わっている」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『なるほど、納得した』という感じで。」

また、確認のために、主人公の言葉を実質的に復唱する」

ああ……。

そういう事。

この薬は半月前、あなたがあの疫病にかかった時に得られた情報から作られていて。

それからあなたも、抽出法を提案したり、一部の作業において、お手伝いしたりしたんだね。

【※大きく息を吐いてから※ 話す。】

『なるほどね、そういう事か』という感じで」

「……じゃあ、あなたが開発に携わったっていうのも、嘘ではないのか」

〈主人公〉

「……そういう事になるわ」

主人公が頷くと、クロエが一度目をそらし、向こうの公園の方へと視線をやった。  
クロエはこの試験を補助する職員であり、また主人公に受験を勧めた友人でもある。  
彼女ほど複雑な立場の人間はいない。

何と言うべきか悩むのも、自然な事だろう。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【※息づかいのみ※】で表現する。

重苦しく息を吸う」

……。

【ここまでの情報を整理し、自分の意見を伝える。

本当は、主人公にはこの件についてゆっくり考えて欲しい。

いつもの主人公らしさが発揮できない状況にあるのなら、せめてそれに近い状態に戻るまで待つてから、判断してほしいと思っている。

だが、実際問題時間がない。

できるだけ早く主人公を決断させなくてはならないので」

じゃあ、結論を言うね。

つまり、ミネルヴァさんは、共同開発した薬の権利をあなたに譲ると言っている。

そういう経緯（いきさつ）なら、あなたはこの薬を自分のものとして提出できると思う。

「本当はよくない事だし、クロエとしても理解できない事だが、実際に横行している事実を述べる。

これを応援はとてできない。

だが、主人公が『どうしても』と言うなら、止めないつもりなので。

なぜなら主人公に『頼むから試験を受けてくれ』としつこく言いつけてきたのは自分なので」

推薦状を書いた人が課題薬の研究を……まあ、手伝ってるのは、よくある事だし。だから。

あなたが『そうする』って言うなら、あたしは推薦状と薬を受け取るよ。

【最大限配慮しながら。

少しだけ強い口調で、でも諭すように。

『それでよくない』と言ってほしくて尋ねている。

『それでよくない』という言葉に誘導しようとして発言している。

もし『それでいい』と言うのなら、それは自分の知っている主人公ではないので。

クロエは無意識のうちに、主人公の本当の気持ちよりも、『自分の好きな主人公でいてほしい。自分の好きな主人公らしい決断をしてほしい』と欲求しているのだ。

……だけど、あなたはそれでいいの？

【最大限配慮しながら。

少しでも強い口調で、念を押すように】

それを。

それを本当に『自分らしいやり方』って言える？」

〈主人公〉

「わからない……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【※息づかいのみ※】で表現する。

とても驚いて、また啞然として。

まさかそんな反応をするとは思わなかったのだ。

先の言葉のような誘導をすれば『それでいい訳がない。こんなのは自分らしい生き方とは言えない』という言葉が確実に返ってくると、本気でクロエは思っていたので――

……！

その時、クロエが『自分らしいやり方とは言えない』と言ってほしがっている事は、主人公にもわかっていた。

主人公自身、当然そう思っている。こんなのはとてもアリス・ルブルトンのやり方ではないし『はい、ミネルヴァの助けを受けて、受験します』などと言うはずがない。

まずはクロエに受験しない事を告げて、それから先ほどの倉庫職員の勧め通り、ミネルヴァが滞在する予定のホテルにでも連絡して。ミネルヴァとの話し合いの場を取り付けるのが妥当な所だろう。

だけど、今は――……。

それが本当に『正しい』事なのかわからない。  
それが本当に『良い』事なのか、わからない。

〈主人公〉

「ごめんなさい……。本当にごめんなさい。」

わたし、本当に。

本当にどうしたらいいのか、わからないの……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「とても驚き、啞然として。

あまりにも意外な展開なので。

また、少し焦る。

主人公がこの調子では、間に合わなくなってしまっているのではないかと考え始める。

それでも優しく、主人公の心をなだめ、彼女らしい答えを出せるように支える事を決めて話す。

クロエの中では、主人公はクロエの問いに『良い訳ないじゃない』と即答して『こんなの納得できる訳がない。今すぐにでもミネルヴァに会いに行ってくるわ』と言い出すと思っていたので。

それがクロエの知る主人公なので。

だが、目の前の主人公は、まるで別人だ。

捨てられた小さな生き物のように目の前の現実を受け入れず、ただ茫然として、自分の意見を話す事すらできなくなっている。



クロエは『ミネルヴァとの暮らしは、それほどまでに主人公を変えたのか』と愕然とし、  
内心強いショックを受けながらも話す」

そっ、か……。

……うん。そうだよね。

急にこんな事になって、気持ちの整理、つかないよね……。

いいよ。後（あと）少しだけなら時間ある。

もう少し、考えて」

主人公が無言でうなずくと、二人の間に沈黙が流れる。

こんな事はいつぶりだろう。

主人公とクロエはいつも仲が良くて、お互いにおしゃべりで。

顔を合わせればいつもいろんな話をして。

それが楽しい話題でなくとも、意見を交わしながら解決を目指してきたはずだ。

それなのに今、二人は黙っている。

言葉がない時間が永遠にも感じられる程、苦しいひとときだった。

10秒ほど沈黙。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【※息を大きく吸ってから※ 話す。

可能な限り穏やかに。

優しく『普段通りのクロエ』を意識して話す。

話を転換する事で、主人公に猶予を与える。

また、普段通りのクロエとして話しつつ、自分の意見を伝える決心を固める】

……じゃあ、その間。

あたしの話聞ってくれる？

あたしね。ちよっとわかった事があるんだ」

〈主人公〉

「え？」

だが、それを破ったのはクロエだった。

クロエは優しく微笑むと、主人公の方に優しく触れ、話し始めた。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく切り出す。

可能な限り穏やかに。

普段通りのクロエとして話しつつ、自分の意見を伝える決心を固める。

『よかったね』とはミネルヴァから推薦を得られて、このまま受験資格を得られそうではなかったね』という意味。

クロエはここに来るまで、ミネルヴァから嘘の情報を与えられていた。それを信じた結果、『よかったね』という言葉に繋がるので」

……あのね。

本当はね。今日。

一緒に『よかったね』って言うつもりだった。

【少し間をあけてから。

ミネルヴァから連絡をもらった時の事について話す】

昨日、連絡もらった時。

ミネルヴァさん、あたしには

【ミネルヴァの発言を引用する。

『彼女』とは主人公の事】

『彼女が受験する気になった。二十八日の一時過ぎに貸し倉庫に行くから、そこで会っ

て、推薦状と課題薬を受け取って欲しい』  
としか言わなかったから。

「それを聞いた時の自分の感想を述べる。

話すうち、だんだん、悲しみと、小さな悔しさが入り混じり始める。

すべてがぬか喜びだったとわかったので。

ミネルヴァの行いが、彼女なりに主人公を思っていたものだという事はわかる。

しかしクロエは、それが主人公の意向を無視しているという事実が許せない。

また、自分も騙されたようでショックなので」

ミネルヴァさん位凄い人の推薦があれば、それなりの薬しか作れなくても、十分（じゅうぶん）受験資格は満たせる。

受験さえできれば……あなたなら絶対受かるし。

そうすれば、ミネルヴァさんのところを辞めた後も、きっといい所に再就職できる。  
色々あったけど……立て直せるって」

〈主人公〉

「……………」

〈クロエ〉

「※大きく息を吸ってから※ 話す。

深呼吸する事で、声を普段のトーンに戻し、主人公を安心させたいので。  
だが、あまりうまくいかず、声が震える。

先程、主人公の後姿を見た時の衝撃を思い出しながら話す」

……それから。さっき、あなたの後姿（うしろすがた）を見た時までは。  
ミネルヴァさんとも、すごくうまく行ってるんだと思ってた。

「何とか明るい声を作りながら。

非常に悩みながら、言葉を選んで話す。

今の主人公の格好は『とても似合っているが、クロエの好みではない』スタイルである。  
また『主人公の本来の好みに即したスタイル』でもないように感じている。

今の主人公は少しきらびやかすぎるし、とても『魔法薬研究の助手として働く、社会人  
一年目の女性』には見えないので。

また、内心では少し苛立っている。

『身なりがすごくよくなっているだけなら、ミネルヴァと友人としてとても親しく色々  
世話を焼いてもらってるとか、ミネルヴァの個人的な意向で、スタッフは皆おしやれさせ  
られていると解釈する事もできる。だけど、主人公のミネルヴァに対する感情は、どう見  
ても友人や雇用主に向けるものではない』

『ミネルヴァの態度も、ただの助手へのものに思えない。つまりそれは、二人が特別な

関係であるという事だ』

『これで二人の関係を察せないなら、その人は主人公に興味がないか、目が節穴だ』と  
思っているのだ』

だって、今のあなた。

服とか、髪とかも。すぐおしやれだし。

『ああ、ミネルヴァさんが色々用意してくれてるのかなあ』って。

『あー、仲良くやってるんだなあ』って思ってたの。

【少し間をあけてから。

過去の出来事を思い出して話す。

前日譚01における、自分の発言について話す】

だから、初めてあなたが、ミネルヴァさんの助手になりたいって言った時……すっごい  
反対した事を後悔して。

『ああ、あんな事言うんじやなかった。ミネルヴァさんは噂なんかとは違う、すごく  
いい人だったんだ』って思ってた。

【少し悔しそうに、言いづらそうに。

これまでミネルヴァが立てられた噂と、今回の行動を総合して、ある結論に至ったので  
でも今は。……今は。

あんな噂が立った理由がわかる気がするよ」

〈主人公〉

「……っ」

クロエが何を言いたいのか、主人公にはもうわかった。

ミネルヴァの所へ行く前、約四十回も説明を受けた事。

当時はあれを噂だろうと思おうとしていたが、真実だったのだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく真面目な口調で、だがきつぱりと。

主人公が、今自分が言わんとしている事を、確実に理解していると確信して言う。

『あの時』とは『前日譚01』での会話を指す」

……あなたも気づいてるんだよね？

あたしがあの時話した事、覚えてるよね。

【あふれ出そうな感情をこらえながら、つとめて冷静に話す。

当時、自分が主人公に伝えた噂について、もう一度話す。

※重要な説明セリフなので、特に聞き取りやすさを意識してください※】

ミネルヴァさんに弟子入りを志願する人は沢山いるけど。

その多くが有名になって、沢山活躍するようになっていくけれど。

その全員が、なぜかごく短期間でミネルヴァさんから離れていて。

弟子入り期間中の事を、話したがないって。

【優しく真面目な口調で、だがきっぱりと。

主人公が、今自分が言わんとしている事を、確実に理解していると確信して言う。

『つまりミネルヴァは、過去にも今回のような事をしてきたのではないか。自分が作った薬の権利を当時の弟子やスタッフに譲ったり、過剰に親切にしたりしたのではないか』

『その結果、当時の弟子は有名になり、活躍するようになった。だが『それはミネルヴァが薬の権利を譲ってくれたからです』とは言えない。だから、弟子入り期間中の事を話そうとしないのではないか』

『みな、すぐにミネルヴァから離れていくのは、権利を譲られた罪悪感に耐えられなかったり『権利さえ得られれば用なし』と距離を置いたりした人間がいるからではないか』という意味で言っている』

その理由を。あなたはもう、わかってるんじゃないの？」

8秒ほど沈黙。



クロエに疑問を突きつけられ、二人の間に再び沈黙が流れる。

〈主人公〉

「……………」。

クロエ……………」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【少し驚いて。

主人公は、なかなか発言しなかった。

なので『もっとはつきり言うべきだろうか』と考えていたところ、主人公がとうとう口を開いたので」

えっ？」

だが、今度は主人公が口を開く番だった。

もう隠せない。もう黙っている事はできない。

こうも心配してくれているクロエに、主人公は伝えなくてはいけない事があった。

〈主人公〉

「あのね。あのね、わたし……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少し戸惑い、驚いた様子で。

主人公があまりにも、らしくない暗い顔で、おずおずと切り出したので。  
その様子に戸惑う」

あっ……。

【少し間をあけてから。

気持ちを整えてから、優しく続きを促す。

少しでも主人公が話しやすいようにと、努力して促す」

うん、聞くよ。

【少し申し訳なさそうに。

『もしかすると、主人公がなかなか発言できなかったのは、自分が一方的に話していたからではないか』と思ったので」

……ごめんね、一方的にしやべって」

〈主人公〉

「いいの。あなたは何も悪くない。  
でも、わたし。あのね……？」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「一言一言、ゆっくりめに。  
とても優しく続きを促す。  
少しでも主人公が話しやすいようにと、  
努力して促す」  
いいよ。ゆっくり話して。  
大丈夫だから」

〈主人公〉

「——わたし、あの人が好きなの」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「不意をつかれたように。」

まさかここで、その件について話し出すとは思っていなかったの？」

〈主人公〉

「……ミネルヴァの事が、好きなの」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【ぼかんとして、言葉を失って。

まさかこのタイミングで、主人公がミネルヴァへの恋愛感情を打ち明けるとは思わなかったの。

『まあ、そうだろう』とは思っていたが、まさか今言うとは思わなかったの。

※『話の内容自体には全く驚いていない』と言うのが伝わるようにお願いします※』  
あ……」

だが、主人公が思いの丈を告白した時、クロエはさほど驚いていないようだった。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「あまり驚いていない様子で。」

『うん、それは知ってる……』『前から分かってた』という感じで。

クロエは、主人公が突然この話をした事には驚いている。

だが、話の内容自体はとくに理解しきっている事だったので。

※『話の内容自体には全く驚いていない』と言うのが伝わるようにお願いします※  
……うん。そうだよね」

〈主人公〉

「え？」

小さく頷くと、少し申し訳なさそうにもう一度頷いて……驚くべき事を言った。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少々戸惑いつつも優しく。」

『あたしはそれをわかっているよ』という事実を伝えつつ、優しく続きを促す。

※『話の内容自体には全く驚いていない』と言うのが伝わるようにお願いします※

うん。

あなたがミネルヴァさんを好きな事は……その、わかるよ。  
うん。もう、わかってる」

〈主人公〉

「……そ。そうなの……？」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少し戸惑いつつも、穏やかに微笑んで。

優しく『主人公がミネルヴァに想いを寄せている事を知っていた』と伝える。

『まさか主人公は、あたしが気づいていないとも思っていたのかな？』と思うと、何だか逆に笑えて来てしまつて、気持ちが落ち着いたので」

うん。

ずっと友達やってるからね。

今日、あなたと話して。すぐわかったよ。

【少し間をあけてから。

すごく優しく続きを促す。

※冷たく聞こえないようにお願いします※

『それが何?』『それが一体なんだっていうの?』と冷たく聞いているような印象には、ならないようにお願いします」

それで?

あなたは、ミネルヴァさんが好きで……。

好きだから、どうしたいのかな?」

〈主人公〉

「……あのね」

主人公、クロエの反応に内心驚きつつも、今はここで時間を浪費するわけにはいかない。優しく促されるままに、本題を話し始める。

〈主人公〉

「わたしは以前、あの人の厚意を踏み躪った事がある。

あの人がわたしのために色々考えて、用意してくれたものの存在にちっとも気づかなくて。……粗末に、扱って。

とても悲しい思いをさせた事があるの。

それを……今でも後悔してる」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく相槌を打ち、続きを促す。

まだ、話が見えない。

主人公が過去の話を始めたので、『それが現状とどんな関係があるのだろう』『時間が無いのに、この話を話して、主人公は大丈夫だろうか』と少し不安にもなっている。

だが、今はそれを飲み込んで話を聞く事に専念する」

……うん」

〈主人公〉

「だから。

だからその時『もう、二度と同じ事は繰り返すまい』と思ったの。  
もう彼女に悲しい顔をさせたくない。

少し感情表現が苦手なあの人事を、誰よりもわかってあげられる人になって。  
その気持ちを全部受け止められる人間になるんだって。

そう誓って、過ぎし始めたの」



●正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく相槌を打ち、続きを促す。

少し話が見えてきた。

主人公は『過去の出来事から、ミネルヴァの行為を踏みにじるような事は今後一切しないと思うようになったらしい』と理解したので」

うん」

主人公の脳裏に、石のミネルヴァと抱き合った日の事が蘇る。

石の彼女には生殖機能どころか、触覚と呼べるものすらほとんどない。

だから石の彼女は、そのせいで主人公を傷つけやしまいかと、当初は触れる事さえ恐れていた。

他の自分がどれだけ主人公と性的なふれあいに耽っても、自分だけは近寄るまいとしていた。

だから主人公は、ある日二人きりになった時、自分から服を脱いで。裸になって彼女を抱きしめて。

唯一、彼女を生物と定義づけている、核を口に含んで、舐めて、愛した。

戸惑う彼女がその感情をなくし、主人公に愛撫される事は、自分にとってごく自然な事なのだと理解してくれるまで、そうし続けた。

——あの時、自分だけは四人のミネルヴァの理解者になって。その想いの全てを受け入れると決めたのに。

〈主人公〉

「わたしは……ミネルヴァが、新しい助手を得た事にどれだけ喜んでいたか、知っている。

『疫病を退治したい』と、とても真剣な気持ちで新薬作りに励んでいる姿を、ずっと隣で見てきた。

でも……それなのに。

そうも大切な薬を、どうしてわたしに渡す気になったのか。

その気持ちも、今はわかるの……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「深く頷き、同意する。

話を理解する。

つまり主人公は『薬を受け取らず、申請しない事は、またミネルヴァの厚意を踏みにじる事にならないか』と悩んでいるとわかったので」

……そっか。

【少し間をあけてから。

少しゆっくり目に。実感を込めて、優しく言う。

主人公の気持ちを代弁しているようで、実は自分の気持ちを話している。

クロエは、主人公の事が好きである。ずっと前から片想いしている。

だから今も、主人公の望みを叶えてあげたいと思っている。

たとえばそれが、主人公と自分以外の人……つまりミネルヴァとの恋を成就させるためのものであっても。

それが主人公の一番叶えたい事ならば、手伝ってあげたいと思っているので」

……うん。わかるよ。

好きな人のお願いは聞いてあげたいもんね。

……それが、自分にとっては辛い事でも。

『いいよ』って言ってあげたいよね。

【少し間をあけてから。

今度は主人公の気持ちを代弁する。

『みんな』とは、主人公、ミネルヴァ、クロエの三人の事。

クロエは先ほどの主人公の発言から、主人公が今、どうするべきか悩んでいると理解したので。

主人公は今『たとえ自分の意向に沿わない事でも、ミネルヴァに従うべきではないか』『そうすれば自分は受験資格を得られるし、ミネルヴァはプレゼントしたかいがあるし、クロエだって喜ぶのではないか』と思っているらしい事を理解したので」  
だから、迷ってるんだね。

『彼女の言う事の方が正しいのかもしれない』

『今回は従った方が、みんな幸せになるのかもしれない』って……」

〈主人公〉

「……クロエ？」

煩悶する主人公の手に、クロエの手が触れる。

その右手は少し冷たくて、でもこちらを覗き込んだその顔はとても優しく、主人公は思わず、その名を呼んだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少しゆっくり目に。優しく諭すように。」

今度は、ミネルヴァの心情を推測して話す。

主人公が今、己の発言を不思議がっている事を承知した上で、それについては答えずに続ける。

主人公は今『クロエが恋愛がらみの話をするなんて、初めてだ』『もしかするとクロエには、好きな人がいるのだろうか』と知っている。

だがその『クロエの好きな人』が自分自身である事には気づいていない。

なのでクロエはこの件について深堀させず、『それでいい。主人公は気づかなくていい』  
と思いつつ続ける」

でもね。

それはきつと、ミネルヴァさんも同じだよ。

彼女だって、自分が正しいかどうかはわからないまま。

それでも推薦状と薬を作って、悩みながらあなたに渡したんだと思う。

【少し間をあけてから。

明るく、少し遠慮しつつ、ちょっと呆れたように。

でも、きつぱりと。

『ミネルヴァのやり方が気に入らない』という事に関しては、主人公の友人として、はつきり言うべきだと思ったので」

……あたしは正直、このやり方好きじゃない。

ちよつと勝手だなあ。あなたの気持ち考えてほしいなあって思うし……。

【自分の意見を伝えたくて、再びミネルヴァの心情を推測して話す。

ミネルヴァのやり方は批判しつつ、ミネルヴァの『たとえ嫌われてもいいから、主人公が試験を受けられるようにしたい。そうすれば主人公の未来が開けるから』という気持ちは非常に理解できるので】

でも、ミネルヴァさん自身、それをわかってて、覚悟の上でやってるのは、わかる。

【少し間をあけてから。

自分なりの結論を述べる】

つまり彼女は『正しい方』じゃなくて『したい方』を選んだんだよ。

だから……あなたにも同じ事をする権利がある。

【少し間をあけてから。

優しく、真剣に問いかける。

今度は自分の意向を交えず、シンプルに、言葉通り『主人公の意向を知りたい』という気持ちで言う】

……あなたは、どうしたい？」

〈主人公〉

「……わたし、は」

クロエが強く主人公の手を握り、主人公の言葉を待っている。

だから主人公は勇気を出せる。

自分らしいかもしれないけれど、間違っているかもしれない事。それを口にできる。

『ここが楽園の入り口で、黙って門をくぐれば本来目指した道に戻れるとわかっている』

『そうする事は、どうしてもできない』と。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【優しく、真剣に相槌を打つ】

うん。あなたの気持ちを聞かせて」

〈主人公〉

「……受驗しない。こんな状態で。こんな気持ちで、申請する事はできない。」

堂々と胸を張ってできない事は、したくない」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく、真剣に相槌を打つ。

ひとつ前より少し力強い相槌になる。

主人公が自分の意志を取り戻し、普段通り自分の気持ちを述べられるようになってきたので」

うん」

〈主人公〉

「……でも、怒っている訳ではないの。

少しだって、怒ってはいない。

だってミネルヴァは、わたしを助けるためにこうしてくれたのだって、わかっているもの……。

今だって、彼女の気持ちをないがしろにしたくはない。

ただ『受けません』『このまま、何も受け取らなかった事にしてあの屋敷に帰ります』なんて事を……するつもりもない」



●正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく、真剣に相槌を打つ。

ひとつ前より、さらに少し力強い相槌になる。

主人公が自分の意志を取り戻し、普段通り自分の気持ちを述べられるようになってきたので」

うん」

〈主人公〉

「だから、話したい。

できるだけ早く、ミネルヴァと会って。

ちゃんと話したい……！」

どうすれば、それができるのか。

できたとして、どう伝えれば、ミネルヴァにこの思いが伝わるのか。

それすらなんの算段もなく、主人公は言った。

まったくもって無計画すぎて、我ながら心配になる。

それでもこれが、主人公が自分なりに出した答えだった。  
心から、自分がしたいと願える事だった。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「※大きく息を吸ってから※ 話す。

優しく、とても納得した様子で。

やっと主人公が、主人公らしさを取り戻したので」

……うん。そうだよね。

「優しく肯定する。

そして、背中を押す。

『それでこそあなただ』『試験の事や、過去の出来事からの反省もとても大切だ。だけど、それ以上に、今のあなたの気持ち以上に大切なものはない』という気持ちで」

あたしもそれがいいと思う。

話しておいで。ミネルヴァさんと。

「少し間をあけてから。

急にきっぱりとした、落ち着いた口調になって。

場の雰囲気、意識的に切り替える」

よし、決まり」

〈主人公〉

「……あ。でも、彼女は今日、学会に……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【明るく穏やかに、でもきっぱりと。

普段のクロエに戻りつつ、いつもより『押しが強い』『意思が明確』『有無を言わせない』イメージで。

しれっと、とても簡単な事をするかのように言う。

主人公の意志が固まったからには、後は一刻も早くミネルヴァに会わせる事こそが、自分の使命だと思っているので。

『』はミネルヴァの言葉の引用なので、漢字の『貴方』になる」

そう。彼女は今日学会。だから追いかけよう。

何が本当に『貴方らしい』事なのか、あなたが直接伝えるの」

〈主人公〉

「……そうよね、まずはどうすれば現地に行けるか考えなくちゃ。

宿泊先の事は聞いているけれど、わたし、まったくあちらの土地勘がなくて……」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【やらざらと、ミネルヴァの本日の行動について推測する。

クロエは、本編04での発言の通り、今回の学会の手伝いをしているので。

つまり、ミネルヴァが会場に行くまでの手伝いもしており、彼女のたどるルートや泊まる場所を把握しているのだ。

しれっと、とても簡単な事をするかのように言う」

ミネルヴァさんって、学会には前乗りしてるんだよね。

じゃあきつと、今頃ホテルでゆっくりしてるはずだよ。

今から汽車に乗って現地まで行けば、全然会えると思う。

【明るく穏やかに、でもきっぱりと。

普段のクロエに戻りつつ、いつもより『押しが強い』『意思が明確』『有無を言わせない』イメージで」

はい、鞆開けて」

そんな主人公に、クロエが有無を言わず鞆を開けるよう促し、自らもまた同じようにする。

それはまるで、これからどうすればいいか、すべてわかっているかのようなしぐさだ。主人公は戸惑いつつも従い、彼女の鞆を思わず覗き込むと……。

SE5 主人公とクロエが、鞆を開ける音

【最初から最後まで流す】

SE6 クロエが、机に地図を広げる音

【最初から最後まで流す】

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【明るく穏やかに。

学会が行われる街の地図を片手に持って話している】

これ、町の地図」

そこからみるみる、泉のように、今必要なものがあふれてきた。

SE7 クロエが、ミネルヴァが止まる予定のホテルに、ペンで丸を付ける音  
【最初から最後まで流す】

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「明るく穏やかに。

ミネルヴァの宿泊先を示しながら言っている」

ホテルは、ここ」

SE8 クロエが、鞆から飲み物と食事、そしてお金を渡す音

【最初から最後まで流す】

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「明るく穏やかに。

ひとまず、持参していた飲み物と食事、後、少し多め位のお金を渡す。

主人公の話しぶりからして、服装はきらびやかでも、現金はそこまで持っていないかも

しれないと思ったので、念のため渡す事にする」

で、こっちは飲み物とお昼ご飯。

あたしのでごめんね。

それから、持ち合わせ足りない困るから、お金ね。

次会う時に返してくれたらいいから」

〈主人公〉

「クロエ……あの……。

どうして……？」

ぽかんとする主人公に、クロエが微笑む。

それはまるで、童話の魔法使いのようだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「明るく穏やかに、どこかすっきりした様子で。

笑いながら、主人公の疑問に答える」

んー？

えー？ 『何で知ってるの？』なんて聞いちゃうの？

ふふ。前に通信した時言わなかった？

この学会。うちも手伝ってるんだよ。

でもって。うちの地区から行く人のホテル手配したのはあたしで」

SE9 クロエが、汽車のチケットを渡す音

【最初から最後まで流す】

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『明るく穏やかに、とてもすっきりした様子で。

全てに吹っ切れたような気持ちで。

『そうだ、あたしは、主人公が自分らしい生き方をするためなら、ちよつと悪い事だつて手伝いたいんだ』『それこそが、あたしの望みなんだ』と気づいたので」

明日から現地行くから、汽車のチケット持つてるのもあたし！

【明るく笑いながら、爽やかに。

今までで一番すっきりと、明るい気分で言う。

そして『こういう事はしてはいけない』と言いながら、主人公の為ならためらわず小さ



なルール違反をする自分は、つまりミネルヴァと同類なのだ気づいたので。

これまでよりもミネルヴァへの理解が進んだ気分で、さらにすっきりした気分です。ふふ。本当はこういうの、教えたり、渡したりしちやダメなんだけどね。でも、やっちゃった！」

〈主人公〉

「クロエ……！」

SE10 クロエが、主人公の肩をぽん、と叩く音

【最初から最後まで流す】

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【少しトーンを落として。

今度は落ち着いた声で、優しく主人公の背中を押す。

そして、自分なりの主人公増を述べる】

さあ。急ごう。

ここでただ泣いてるなんて、ちつともあなたらしくないよ。

「少し泣きそうになりながらも、明るく。

これが一番言いたい事なので。

つまり、クロエの思う主人公とは『納得できない事には、イエスと言わない女性』なので。

主人公がそうでさえあれば、たとえ他の人と幸せになろうと、クロエは受け入れられるので」

あたしの知ってるあなたに戻って。

……納得できない事に『いいよ』なんて言わないで」

〈主人公〉

「……ありがとう……!」

その手が肩に触れ、主人公を明るく励ます。

その声はどこか震えていて主人公は不思議に思うが、それについて尋ねる間もなく、クロエは次の言葉を言う。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少し泣きそうになりながらも、とても明るく。

主人公の背中を押す発言をする。

できるだけ普段の明るい自分であろうとする」

そう。その意気」

〈主人公〉

「行ってくる。このお礼は、必ずするわ。

それから……必ず、彼女とちゃんと話して帰ってくる」

SE11 主人公が椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「少し泣きそうになりながらも、とても明るく。

本当は今にも泣き出したい。

今、自分が失恋したとはつきりわかったので。

十年以上ずっと主人公の傍にいて、誰よりも彼女を理解しているつもりで。

いつでも気持ちを伝えられる関係だったのに。

それをしなかった事で、自分はどうとう失恋するんだとわかったので。

しかし主人公は、泣きそうなクロエの事を『クロエの涙は何だか不自然だ。こんなに涙もろい人だったろうか。だが、クロエは自分の気持ちにとっても寄り添って、共感してくれただから、もらい泣きしてくれているのかもしれない。なんて優しい友人なのだろう』と解釈しているようだ。

なのでその解釈に乗る事にして、涙の理由を隠す」

……気を付けてね。

【涙まじりの震える声で。

でも、精一杯明るく言う】

いい報告を待ってる」

〈主人公〉

「ええ。……行ってきます！」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【涙まじりの震える声で。

でも、精一杯明るく言う。

前日譚01との対比を意識して。

前日譚01におけるこのセリフは『納得はいかないが、とりあえず主人公の気分を暗くしたくない。なので、感情を隠して明るく言う』というものだった。

しかし今は逆で『自分にとってはとても悲しくつらい状況だが、納得している。だから、泣きそうではあるが、明るい気持ちで送り出せるのも素直な気持ちである』と言う感じで「じゃあ……いつてらっしゃい！」

そして主人公は、また。

初めてミネルヴァに会いに行った半月前のあの日のように……。

親友に見送られながら、今一番自分が向かうべき場所へと走っていった。

ここでフェードアウトして終了。